



## 赤人「神岳作歌」考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朴, 喜淑 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00005061">https://doi.org/10.24729/00005061</a>

# 赤人「神岳作歌」考

朴 喜淑

## 一 はじめに

神岳に登りて、山部宿祢赤人が作る歌一首 并せて短歌

(A) 三諸の 神奈備山に 五百枝さし しじに生ひたる  
つがの木の いや継ぎ継ぎに 玉葛 絶ゆることなく あ  
りつつも 止まず通はむ 明日香の 旧き都は / (B)

山高み 川とほしろし 春の日は 山し見が欲し 秋の夜  
は 川しさやけし 朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に かはづは  
騒く / (C) 見るごとに 音のみし泣かゆ 古へ思へば

(3・三三四)

## 反歌

明日香川 川淀去らず 立つ霧の 思ひ過ぐべき 恋にあ  
らなくに (3・三三五)<sup>1</sup>

右に掲げた、万葉集卷三の雑歌部におさめられている一首(以下、「神岳作歌」と記す)は、題詞に「神岳に登りて、山部宿祢赤人が作る歌一首」とあるだけで、その作歌年次や作歌事情に関しては不明である。長歌に歌われている「明日香の 旧き都」は、持統八年(六九四年)十二月に行われた藤原遷都により、旧都となった「天武・持統両天皇の皇宮清原宮の跡」(『新編全集』)を中心としている。その旧都の明日香の神岳に登って赤人はこの二首を作っている。本稿では、旧都明日香が歌われることの意味を考えながら、当該「神岳作歌」をどう捉えるべきか検討していくことにする。

## 二 長歌の(A)、(B)の部分について

長歌は、「くは」という形で「明日香の 旧き都」が提示される(A)<sup>2</sup>から始まる。その「旧き都」は、「つがの木のい

や継ぎ継ぎに 玉葛 絶ゆることなく ありつつも 止まず通はむ 空間であり、こうした表現は上野誠氏「故郷・飛鳥思慕の文学―『万葉集』と天武皇統―」（『古典と民俗学論集（桜井満先生追悼）』一九九七年／『古代日本の文芸空間』所収）が、

赤人はこの作品で「ありつつも やまず通はむ」と、最高の讚め言葉で飛鳥への強い執着を表現している。こういった飛鳥の造形は、近江・藤原・平城・久迩の宮都が「旧都」となった時とは、まったく異なるものといえるだろう。

というように、旧都明日香に対する讚美表現である。

続く（B）の部分は、旧都明日香の山と川、春と秋、朝と夕などが『万葉集』内における最も整備された形（稲岡耕二氏『鑑賞日本の古典』万葉集一九八〇年）で表現されている。この（B）の部分について梶川信行氏「赤人の《芸》―『登神岳作歌』をめぐって―」（『万葉学論叢（松田好夫先生追悼論文集）』一九九〇年／『万葉史の論 山部赤人』所収）は、

「山」と「川」、「春」と「秋」、「朝」と「夕」という三組に 対句を駆使し、明日香のすばらしい自然を描いている。もちろん、こうした対句も、国土讚美的天皇讚歌の典型である人麻呂の吉野讚歌を踏襲したものであろう。また、国土讚美の歌の《叙景》は、『あり得べき景』の姿を言上げる

のがその通例だが、ここに「山高み」、「山し見が欲し」、「河しさやけし」などどうたわわれているのは、やはり「明日香の古き都」が『あり得べき景』であるということと言上げているように見える。

と述べている。たしかに人麻呂の吉野讚歌や、笠村村と車持千年の吉野行幸歌などにみえる山・川の美しい風景描写は、吉野への讚美表現であり、それが「あり得べき景」であることは論を俟たない。さらに集中の赤人の歌には、

山部宿祢赤人が作る歌二首 并せて短歌

やすみしし わご大君の 高知らす 吉野の宮は たたなづく 青垣隠り 川なみの 清き河内そ 春へには 花咲きををり 秋へには 霧立ち渡る その山の いやますますに この川の 絶ゆることなく ももしきの 大宮人は 常に通はむ (6・九三三)

反歌二首

み吉野の 象山のまの 木末には ここだも騒く 鳥の声かも (6・九二四)  
ぬばたまの 夜のふけ行けば 久木生ふる 清き川原に千鳥しば鳴く (6・九二五)

八年丙子の夏六月、吉野の離宮に幸す時に、山部宿祢

赤人、詔に応へて作る歌一首 并せて短歌

やすみしし 我が大君の 見したまふ 吉野の宮は 山高  
み 雲そたなびく 川早み 瀬の音を清き 神さびて 見  
れば貴く 宜しなへ 見ればさやけし この山の 尽きは  
のみこそ この川の 絶えばのみこそ ももしきの 大宮  
所 止む時もあらめ (6・二〇五)

反歌一首

神代より 吉野の宮に あり通ひ 高知らせるは 山川を  
良み (6・二〇六)

と歌うものがあり、吉野の山と川とが讃美され、そこに通い続ける大官人が詠まれている。当該長歌の(B)の部分もこれらの歌と同様、旧都明日香に対する讚美の表現であることは間違いない。(A)(B)の部分を上のように理解した上で、次は旧都明日香に接する心情、当該長歌の主旨、本旨が集約されてある(C)の部分について詳しくみていきたい。

### 三 長歌の(C)の部分について

長歌結解部でもある(C)の「見るごと」に 音のみし泣かゆ古へ思へば」について稲岡耕二氏(前掲書)は、「旧都悲傷の抒情」としながら、「叙事部分から末尾三句にかけ、景と情との間

に微かな分裂が感じられる」と、(B)の部分との不自然さを指摘している。<sup>3)</sup>

これに対して、太田豊明氏「神岳に登る歌と春日野に登る歌」(『セミナー万葉の歌人と作品 第七巻』二〇〇一年。以下、太田論文Aとする)は、

これらの論では、Cに表現されている抒情の内容を、人麻呂の「近江荒都歌」に通ずるような、現在のさびれた明日香古京に対する「悲傷」であるとするとするものが多い。その限りでは、Cは、讚歌的文脈を形成しているBの部分とは打ち合わないとされる。→(中略)→しかし、ここに見られる抒情を「悲傷」や「悲嘆」と呼んでしまうには、表現があまりに簡略で淡泊すぎるくらいがあるように思われる。

→(中略)→むしろ、そのような淡々たる叙述の中に、単に悲嘆や荒廃を述べようとしているのとは異なった意図を見るべきで、そこにはBの讚美的文脈と広く結び付くべき心情が含まれているのではないかと思われる。

と反論し、「『見るごと』という『見る』対象が、明日香の讚美された景観」(B)である以上、(C)の「見るごと」に 音のみし泣かゆ」も讚美の表現であるとす。

しかし、当該長歌においてこの「見るごと」に 音のみし泣か

ゆ」を、讚美の表現と解することは可能だろうか。集中の「音十泣く」の用例、四十一例の中には、太田論文Aがいうような讚美の例は一例もない。「音十泣く」は、相聞(十三例)、挽歌(十二例)、雑歌(三三例)、そして、恋歌的な歌(五例)、その他(八例)があり、別れ・会えないこと、悩みなどで声をあげて泣くという、嘆きの表現として用いられている。その中で当該長歌と同様「見る」ことに「音のみし泣かゆ」と歌っている例が二例ある。

① つぎねふ 山背道を 他夫の 馬より行くに 己夫し  
徒歩より行けば 見ることに 音のみし泣かゆ そこ思  
ふに 心し痛し たらちねの 母が形見と 我が持てる  
まそみ鏡に 蜻領巾 負ひ並め持ちて 馬買へ我が背

(13・三三二四)

## 反歌

泉川 渡り瀬深み 我が背子が 旅行き衣 濡れ湿たむ  
かも

(13・三三二五)

## 或本反歌曰

まそ鏡 持てれど我は 験なし 君が徒歩より なづみ  
行く見れば

(13・三三二六)

馬買はば 妹徒歩ならむ よし多やし 石は踏むとも  
我は二人行かむ

(13・三三一七)

② 興に依り、各高円の離宮処を思ひて作る歌五首

高円の 野の上の宮は 荒れにけり 立たしし君の 御  
代速そけば

(20・四五〇六)

高円の 峰の上の宮は 荒れぬとも 立たしし君の み  
名忘れめや

(20・四五〇七)

高円の 野辺延ふ葛の 末つひに 千代に忘れむ 我が  
大君かも

(20・四五〇八)

延ふ葛の 絶えず偲はむ 大君の 見しし野辺には 標  
結ふべしも

(20・四五〇九)

大君の 継ぎて見すらし 高円の 野辺見ることに 音  
のみし泣かゆ

(20・四五一〇)

①は、山城への道を他人の夫は馬で行くのに自分の夫は徒歩で行くので、見るたびに声をあげて泣くと歌う。おそらく下級官人であろう「己夫」は、「見ることに」とあるから、山城の道を幾度も往復したことになる。馬に乗ることの出来ない「己夫」と、馬に乗ることの出来る「他夫」とが比較され、「富貴ナラヌ男」(『代匠記(稿)』)の妻は、それを見るたびに声をあげて泣く。妻が泣く原因は、夫が馬を持っていないからである。妻にとつて馬は、母の形見として持っている「まそみ鏡に 蜻領巾 負ひ並め持ちて」買いたいくらいの切実なものである。この切実

さは、或本の反歌の「まそ鏡 持てれど我は 験なし」からもうかがえる。

一方、②は聖武天皇の離宮があつた高円山を歌つたものである。ここに歌われる「君」はいうまでもなくこれらの歌が詠まれる二年前（七五六年）に崩じた聖武天皇のことを指す。最初の四首は、高円離宮は荒れ果ててしまつたが、君の名は忘れることなく、絶えず偲ぼうと歌う。そして、最後の四五〇歌では今でも君がご覧になつてゐるに違ひない野辺を見るたびに「音のみし泣かゆ」と歌う。この「音のみし泣かゆ」について太田論文Aは、

高円離宮の荒廢に觸發されて起きた、今は亡き聖武天皇に対する追慕の念がこの「音のみし泣かゆ」には満ちてゐるのであり、その心情は裏返せば、聖武天皇の愛した高円離宮に対する讚美の念にもなつてゆく。すなわち、「高円の野辺」が「大君（＝聖武の靈魂）の繼ぎて見すらし」とされてゐる限りに於いて、この四五〇歌では、「音のみし泣かゆ」に見合つたかたちでの、現在でも天皇（の靈）が見続けるものとしての高円離宮に対する讚美の念も表出されてゐる。

と述べてゐる。そして、「讚美と追慕との重層した心情のありよ

う」は「神岳作歌」に類似してゐるといふ。しかし、②の四五〇歌に太田論文Aのいう、「高円離宮に対する讚美の念」は表われてゐるだらうか。その点を考えるために、卷二の「皇子尊宮舍人等働傷作歌二十三首」（二・一七一～一九三）をみてみたい。この二十三首は皇太子草壁に仕えた舍人たちが、皇子の死を悼んで詠んだ挽歌群であるが、その中に、

高光る 我が日の皇子の 万代に 国知らさまし 島の宮  
はも

高光る 我が日の皇子の いましせば 島の御門は 荒れ  
ざらましを

み立たしの 島を見る時 にはたづみ 流るる涙 止めそ  
かねつる

み立たしの 島の荒磯を 今見れば 生ひざりし草 生ひ  
にけるかも

朝ぐもり 日の入り行けば み立たしの 島に下り居て  
嘆きつるかも

と歌うものがある。ここには草壁皇子の居所であつた島の宮が荒れてゆく様子や、皇子がお立ちになつて見ていた島の宮の島が何度も歌われており、島は皇子が愛していた場所であつたことが分かる。舍人は皇子が愛していたその島を見て嘆くのであ

るが、生前愛していた場所を対象に嘆くという点において②と共通している。そして、その嘆く行為の前提にあるのは、島や高円の野辺を愛していた人物、つまり皇子や天皇がこの世にいないということである。②の四五—〇歌には、高円の野辺を愛していた大君がこの世にいないため、見るたびに泣くという悲傷の念が表われていると解するしかあるまい。大君が健在であつてご覧になつている高円の野辺ではなく、「継ぎて見すらし」と推量形をもつて表現することしか出来ない高円の野辺は、だからこそ見るたびに声をあげて泣く対象となつたのである。

では、当該長歌の「見るごとに 音のみし泣かゆ」はどのよう<sup>1)</sup>に解釈すればよいだろうか。ここで話者が泣く原因は、「見るごとに 音のみし泣かゆ 古へ思へば」とあるように、「古へ」を思うからである。その「古へ」は明日香に都と、大君が存在していた時代であり、それが今は旧き都となつて、「古へ」と今とが比較される。

次の歌は赤人と同じ第三期の歌人、笠金村の歌である。

冬十月、難波宮に幸す時に、笠朝臣金村が作る歌一首  
併せて短歌

おし照る 難波の国は 葦垣の 古りにし里と 人皆の  
思ひやすみて つれもなく ありし間に 続麻なす 長柄

の宮に 真木柱 太高敷きて 食す国を 治めたまへば  
沖つ鳥 味経の原に もののふの 八十伴の緒は 慮りし  
て 都なしたり 旅にはあれども (6・九二八)

反歌二首

荒野らに 里はあれども 大君の 敷きます時は 都とな  
りぬ (6・九二九)

(第二反歌省略)

この作品では大君の存在、大君がそこにいることによつて都となつたと詠まれている。これに対し当該長歌では大君の不在の地を「旧き都」と表現しているのである。そして、大君不在の旧都の景が「あり得べき景」であればあるほど、その背景となる大君の不在も浮き彫りになつてしまふのであり、「古へ」と今との落差も顕著になつてくる。高松寿夫氏「山部赤人」神岳作歌の方法―王権不在の荒都歌―(早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊(文学・芸術学編)十八号・一九九二年)『上代和歌史の研究』所収)が『哭のみし泣かゆ』という言葉に込められた情は、悲嘆の情であることは間違いないかと指摘しているように、やはり「音のみし泣かゆ」は「悲嘆の情」を表わしていると考えるべきだろう。

(B)の部分の美しい風景の描写は、旧都に対する悲傷の念を

強調するものにはかならない。大君不在の旧都の美しい景を見る感情は、(C)の「見る」とに音のみし泣かゆ古へ思へば」という嘆きの表現に繋がっていくのであり、こうした旧都に対する嘆きの表現は、人麻呂や黒人が旧都近江大津宮を見て悲しむ歌に通じるのである。

#### 四 「明日香の 旧き都」を歌うことについて

旧都を歌う集中の例は人麻呂黒人に始まる。壬申の乱の後、都は近江大津宮から明日香の浄御原宮に移され、以降藤原京、平城京、久邇京などの遷都が行われる。都だった地は遷都によって旧都となり、その旧都を歌うのが旧都歌である。

近江の荒れたる都に過る時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

くいは走る 近江の国の 楽浪の 大津の宮に 天の下  
知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は こと聞け  
ども 大殿は ことと言へども 春草の しげく生ひたる  
甕立ち 春日の霧れる (注略) ももしきの 大宮所 見れ  
ば悲しも (注略) (一・二九)

#### 反歌

楽浪の 志賀の唐崎 幸くあれど 大宮人の 舟待ちか

赤人「神岳作歌」考

ねつ (一・三〇)

楽浪の 志賀の (注略) 大わだ 淀むとも 昔の人に ま  
たも逢はめやも (注略) (一・三二)

高市古人、近江の旧き堵を感傷して作る歌 或書云高市  
連黒人

古への 人に我あれや 楽浪の 旧き京を 見れば悲しき  
(一・三三)

楽浪の 国つ御神の うらさびて 荒れたる都 見れば悲  
しも (一・三三)

高市連黒人が近江の旧き都の歌一首  
かく故に 見じと言ふものを 楽浪の 旧き都を 見せつ  
つもとな (三・三〇五)

これらの歌は、題詞や歌の表現によって分かるように、旧都の衰退に焦点が置かれ、それに接する感情は「大宮所 見れば悲しも」(二九)、「旧き京を 見れば悲しき」(三三)と表現されている。このような旧都の衰退・荒廢ぶりを見て悲しむ歌は、

奈良の京の荒墟を傷み惜しみて作る歌三首 作者不審  
紅に 深く染みにし 心かも 奈良の都に 年の経ぬべき

世間を 常なきものと 今そ知る 奈良の都の うつろふ  
(6・一〇四四)



見れば (6・一〇四五)

石つなの またをち返り あをによし 奈良の都を また  
も見むがも (6・一〇四六)

奈良の故郷を悲しびて作る歌一首 并せて短歌

く新た世の 事にしあれば 大君の 引きのまにまに 春  
花の うつろひ変はり 群鳥の 朝立ち行けば さすだけ  
の 大官人の 踏み平し 通ひし道は 馬も行かず 人も  
行かねば 荒れにけるかも (6・一〇四七)

反歌二首

立ち変はり 旧き都と なりぬれば 道の芝草 長く生ひ  
にけり (6・一〇四八)

なつきにし 奈良の都の 荒れ行けば 出で立つことに  
嘆きし増さる (6・一〇四九)

春の日に、三香原の荒墟を悲しび傷みで作る歌一首  
并せて短歌

く古りにし 里にしあれば 国見れど 人も通はず 里見  
れば 家も荒れたり はしけやし かくありけるか 三諸  
つく 鹿脊山のまに 咲く花の 色めづらしく 百鳥の  
声なつかしき ありが欲し 住み良き里の 荒るらく惜  
しむ (6・一〇五九)

反歌二首

三香原 久邇の都は 荒れにけり 大官人の うつろひぬ  
れば (6・一〇六〇)

咲く花の 色は変はらず ももしきの 大官人ぞ 立ち変  
はりける (6・一〇六一)

のように第四期まで続く。集中の旧都歌は、旧都の荒廢の景が  
中心に捉えられているといってもよい。これらの歌は旧都を詠  
んだ旧都歌でありながら、またその旧都の荒廢ぶりを詠んだ荒  
都歌でもあるといえよう。

一方、当該長歌では旧都明日香の讚美表現(A)(B)と、  
それに対する嘆きの表現(C)から成る。高松論文(前掲論文)  
は(C)の部分の「音のみし泣かゆ」を「悲嘆の情」としな  
がら、それを「古京の荒廢」に対する抒情と考えるべきと指摘  
し、「神岳作歌」を「旧都に立つてその荒廢を嘆くことをテーマ  
とした作品」であるとす。

しかし、「神岳作歌」では旧都明日香を見て嘆きながらも、荒  
廢したとは表現されていない。そこにはおそらく、上野論文(前  
掲論文)が、

『万葉集』には、飛鳥旧都の景を「うらさび」た場所、「荒  
らび」た場所として造形した歌は、存在しないのである。

く(中略)く飛鳥は天武・日並皇統創業の「古郷」「故郷」として、藤原宮遷都以降、奈良朝後半まで認識されていたと思われるのである。そういった認識を、『万葉集』の「古郷」「故郷」の用法は反映しているであろう。く(中略)く七八番歌が示すように故郷・飛鳥思慕の文芸の形成の端緒は、当然のことながら飛鳥を望むことの難しい平城京への遷都にある。く(中略)く故郷・飛鳥思慕の文芸形成の背景には、奈良朝後半まで受け継がれた《天武皇統の始発の聖地としての飛鳥》という、かくのごとき認識があった。

と指摘しているように、「天武・日並皇統創業の『古郷』『故郷』としての明日香、「天武皇統の聖地」としての明日香という認識があり、その認識は明日香を荒廃した空間として表現することを阻害したのではなからうか。いずれにしても、荒廃した様子が歌われていない以上、当該「神岳作歌」を荒都歌と理解することは出来まい。

但し、ここで一つ注意しなければならないのは、かつて都だった明日香を「フルサト(フリニシサト)」「古郷」「故郷」として捉えて詠んでいる歌を、「神岳作歌」と同一にみなしてよいのかということである。上野論文(前掲論文)は、

当該赤人歌が主題としているのは過去の都の美しさではな

く、都があった過去から現在に至るまでの変わることにない美しさなのである。

とし、

『万葉集』にみられる二つの現象に留意した。一つは、万葉歌においての「古郷」「故郷」は飛鳥を示すという原則があること。もう一つは、故郷たる飛鳥は讃歌をもつ旧都であること、の二つである。

とする。そして、「神岳作歌」を、「《旧都歌》《荒都歌》というより、《讃歌》としての質をもつ歌」と規定する。

しかし、「神岳作歌」では明日香を「フルサト(フリニシサト)」と歌わずに、「旧き都」と定義している点は注意されるべきではなからうか。明日香を「フルサト(フリニシサト)」と歌う例は、

①心ゆも 我は思はずき また更に 我が故郷に 帰り来むとは (4・六〇九)

②君により 言の繁きを 古郷の 明日香の川に みそぎしに行く(注略) (4・六二六)

③くぬばたまの 夜昼といはず 思ふにし 我が身は瘦せぬ 嘆くにし 袖さへ濡れぬ かくばかり もとなし恋ひば 古郷に この月ごろも ありかつましじ (4・七三三)

④古郷の 飛鳥はあれど あをによし 奈良の飛鳥を見  
らくし良しも (6・九九二)

⑤ますらをの 出で立ち向かふ 故郷の 神奈備山に 明  
け来れば 柘の小枝に 夕されば 小松が末に 里人の  
聞き恋ふるまで (10・一九三七)

⑥雨間明けて 国見もせむを 故郷の 花橘は 散りにけ  
むかも (10・一九七二)

⑦古郷の 初もみち葉を 手折り持ち 今日そ我が来し  
見ぬ人のため (10・二二一六)

⑧我が里に 大雪降り 大原の 古尔之郷に 降らまく  
は後 (2・一〇三三)

⑨浅茅原 つばらつばらに 物思へば 故郷し 思ほゆる  
かも (3・三三三三)

⑩鶉鳴く 古郷の 秋萩を 思ふ人どち 相見つるかも  
(8・一五五八)

⑪藤原の 古郷の 秋萩は 咲きて散りにき 君待ちか  
ねて (10・二二八九)

⑫人もなき 古郷に ある人を めぐくや君が 恋に死な  
せむ (11・二五六〇)

⑬大原の 古郷 妹を置きて 我寝ねかねつ 夢に見え

つつ

(11・二五八七)

と十三例ある。これらの例は①、②、③、⑧、⑪、⑫、⑬が相聞であり、他は雑歌である。その雑歌の例の中で④、⑤、⑥、⑦、⑩は題詞により、「フルサト(フリニシサト)」「明日香の元興寺や鳥、花、紅葉などを詠んでいることが分かる。そして、⑨は旅人作であり、同じ時の作でこの歌の後に配列されている三三四歌に「香具山の 古りにし里を」とあって、『全注』によれば旅人の旧宅が香具山附近にあったとされている。すなわち、これらの「フルサト(フリニシサト)」の例は、いずれも明日香への私的な思いを詠んでいるものといえよう。<sup>11)</sup>これに対して、明日香を「旧き都」と歌う例は、「神岳作歌」と巻十三に一例のみある。

みてぐらを 奈良より出でて 水蓼 穂積に至り 鳥網張  
る 坂手を過ぎ 石ばしの 神奈備山に 朝宮に仕へ奉  
りて 吉野へと 入ります見れば 古へ思ほゆ (13・三三三〇)

反歌

月も日も かはらひぬとも 久に経る 三諸の山の 離  
宮所 (13・三三三三)

右の二首、ただし或本の歌に曰く、「旧き都の」と

## 「宮所」

この歌は奈良朝の吉野行幸の際、明日香で詠まれたものである。<sup>(12)</sup>三三三〇歌の「朝宮に 仕へ奉りて」とは、「臣下の者の天皇への奉仕」(『全注』)を表わし、その後吉野へと向かう一行を見送りながら、三三三一歌で離宮を「旧き都の とつ宮所」と讚美している。つまり、この歌は公的な立場で詠んだものということである。その点は「神岳作歌」も同様である。

都が遷されると、都だった地は「フルサト(フリニシサト)」となってしまう。と同時に「旧き都」にもなってしまう。私的な思いに立脚した「フルサト(フリニシサト)」という把握に比べて、「旧き都」は公的な立場からのものであり、この二つを同一の概念とすることは出来まい。「神岳作歌」ではかつて都だった明日香が「旧き都」と把握されているのである。当該長歌は明日香の持つ「フルサト(フリニシサト)」という属性と、「旧き都」という属性の中で、明日香を「旧き都」として捉えて悲しむものであった。

以上、長歌をみてきたが、次は反歌について結句の「恋」を中心に考えてみることにする。

## 五 反歌について

反歌の上句には明日香川の霧が歌われている。長歌の(B)の部分において旧都明日香の景は、山と川、春の日の山と秋の夜の川、朝雲と夕霧の三つの対句が、空間から四季の時間の空間へ、そして、一日の時間の中の空間へと焦点が絞られていた(『釈注』)。反歌においてはその絞られた空間を明日香川の霧に収斂した上で、序詞としている。結句の「恋」については、

古へを慕い思う情とする説―『古義』、『金子評釈』

旧き都に対する思慕とする説―『窪田評釈』、『総釈』、『古典大系』、『釈注』、『新大系』、『全注』

系』、『全注』

家人を思う情とする説―『新編全集』

明日香への慕情とする説―『和歌大系』

などといった説が行われているが、梶川論文(前掲論文)は、  
く(中略)く長歌の末尾では恋の情調を色濃くただよわせている。そればかりではなく、反歌では一層明瞭に《恋の嘆き》をうたっている。従って、長歌と反歌全体として見れば、結局《恋の嘆き》に収斂されていると言ってよいだろう。この歌は、古京明日香に対する《懐古の情》をう

たったものではなく、古京明日香を舞台とした過去の恋をうたったものではなからうか。

とする。その上で長歌が儀礼的な表現になっているのは、赤人の宴席での「芸」としての歌のテクニクのひとつであつたと述べている。梶川論文が「神岳作歌」の主題を「恋の嘆き」とする根拠は、長歌の「音のみし泣かゆ」の句が恋歌に多く見られる表現であり、会えない嘆きを歌う万葉の恋歌の典型的な表現である、と位置づけたことによる。しかし、「音のみし泣かゆ」の表現は、先に述べたように恋歌ばかりではなく、挽歌などにも多くみられる表現である。その点については梶川論文も認めており、さらに例は少ないが、

く年長く 病みし渡れば 月累ね 憂へ吟ひ ことことは  
死ななと思へど 五月繩なす 騒く子どもを 打棄てては  
死には知らず 見つつあれば 心は燃えぬ かにかくに  
思ひ煩ひ 音のみし泣かゆ (5・八九七)

慰むる 心はなしに 雲隠り 鳴き行く鳥の 音のみし泣  
かゆ (5・八九八)

のように、思い悩むことによる表現でもある。

また、「恋」ということが異性に對するものとも限らない。「恋」は集中に八二五例あり、その恋の対象は、君や妹など人で

ある場合がほとんどだが、吉野のような土地や、花や鳥・鳥の声などの自然の景物、老婆の「強ひ語り」といった例もある。さらに「古へ」が対象となっている例も二例ある。

吉野宮に幸す時に、弓削皇子、額田王に贈り与ふる歌  
一首

古へに 恋ふる鳥かも ゆづるはの 御井の上より 鳴き  
渡り行く (2・一一一)

額田王の和へ奉る歌一首 倭京より進り入る

古へに 恋ふらむ鳥は ほととぎす けだしや鳴きし 我  
が思へること (2・一一二)

この二首は、蜀魂の故事をふまえながら先帝天武天皇への思慕を表わしている。また、「恋」という表現は使われていないが、近江の海 夕波千鳥 汝が鳴けば 心もしのに 古へ思ほゆ (3・二六六)

と、人麻呂が近江の旧都への思いを詠んだものもあり、「古へ」を追い求める性質を想起しているという点において、当該反歌と通じているといつてよいだろう。

当該反歌の「恋」は、長歌の(C)の部分の「古へ思へば」の、「古へ」への「恋」ではなからうか。「古へ」を思うと旧き都の景を見るたびに声をあげて泣くと歌つた長歌を受け、

その「古へ」への思いを「恋」ということばで表わしているのである。

## 六 むすび

以上、当該「神岳作歌」が明日香を悲傷する旧都歌であることと述べてきた。それは「天武天皇の聖地」という認識に裏打ちされているため明日香の荒廃は歌われず、人麻呂や黒人の荒都歌とは一線を画していた。

「神岳作歌」における明日香の風景(B)の部分は、讚美される「あり得べき景」でありながら、都の景としては、その中心たる大君が欠落している。だからこそ、明日香の美しい自然があるにもかかわらず、(C)において「音のみし泣かゆ」と歌っているのである。(B)の部分は、大君のいない、旧都となった今と都があつた「古へ」との落差をさらに強調する。そして、「見る」ことに音のみし泣かゆ 古へ思へば(C)と、その落差を嘆くことこそが、旧都明日香を歌う意味だったといえよう。

人麻呂が近江の旧都を「大宮所 見れば悲しも」(二九)と歌い、黒人が「旧き都を 見れば悲しき」(三三)と歌つたように、旧都明日香を訪れ「旧き都をく見る」ことに音のみし泣かゆ(三三四)と歌つたのである。当該「神岳作歌」は、荒都歌なら

ざる旧都歌として定位されるべきであろう。

### 【注】

- (1) 歌の引用は、『万葉集電子総索引(CD-ROM)』(二〇〇九年)による。但し、一部私に改めた箇所がある。また、注釈書名は通行の略称を用いた。
- (2) (A)、(B)、(C)の分類は、鈴木日出男氏「山部赤人の技巧」『万葉集を学ぶ 第三集』一九七八年)による。
- (3) (B)と(C)の部分について「清水克彦氏「称美と悲嘆―赤人の神岡の歌について―」(女子大国文一〇六号・一九八九年)『万葉論集』所収)は、(B)の部分を称美の叙述、(C)の部分を悲嘆の叙述とした上で、この二つの憎は交錯させるべきではなく、同じ明日香古京鎮魂、という目的を持った平行する二つの具体的な情の表現、と位置づけている。
- (4) 集中の「音+泣く」の用例(「神岳作歌」の他四十一例)。
  - ・相聞―4・四九八、五〇九、五一五、六一四、六一九、六四五、9・一七八〇、11・二六〇四、12・三二二八、14・三三六二、三三六二或本歌、三三九〇、三四五八の十三例。
  - ・挽歌―2・一五五、二三〇、3・四五六、四五八、四八一、四八三、9・一八〇一、一八〇四、一八〇九、一八一〇、13・三三四四、19・四二二五の十二例。
  - ・雑歌―3・三〇一、5・八九七、八九八の三例。
  - ・恋歌的な歌―15・三六二七、三七三二、三七六八、三七七七、19・四一四八の五例。
  - ・その他―13・三三二四、14・三四七一、三四八五、17・四〇〇八、20・四四三七、四四七九、四四八〇、四五二〇の八例。

(5) この他にも(C)の部分については『窪田評釈』が、

「音のみし泣かゆ」は、(中略)「声を立ててばかり泣かれるで、感動の極めて強いことを現す成語。この感動は、故京に対する悲しみではなく、その風光にたいしての懐かしみである。」

と注して、明日香の故京を見る度毎に感動のあまり声をあげて泣くのだとするが、集中の「音+泣く」の用例には、『窪田評釈』がというような感動のあまり声を立てて泣く例はない。

(6) 部立のない部分で、明らかに恋歌であると思われるものを恋歌的な歌とした。

(7) 四五〇歌について『集成』は、「前歌の『見しし野辺』を受け、形見の地への堪えがたい思慕を挽歌的発想で述べることで、全体を結んだ」と述べている。

(8) 万葉初期の歌人である額田王の歌に、

秋の野の み草刈り苜蓿 宿れりし 宇治のみやこの  
(一・七)

仮廬し思ほゆ

と歌うものがあるが、「宇治のみやこ」は、「近江行幸の途中仮泊した行宮」(『新編全集』)を指すので、旧都を歌ったものとはいえない。

(9) これらの十三例の「故郷」、「古郷」の文字は「フルサト」(①)

⑦、「フリニシサト」(⑧⑩)と訓むことが出来るが、上野誠氏「万葉語『フルサト』の位相—大伴家閑係歌を手がかりとして—」(奈良大学総合研究所報四号・一九九六年)「古代日本の文芸空間」所収)は、「故郷」「古郷」という漢語に、「フルサト」「フリニシサト」という訓が、共有されているのである」とし、

歌中の語として「フルサト」「フリニシサト」を比較した

場合、「フリニシサト」には、「三」(完了の助動詞)と「シ」

(過去の助動詞)が、「サト」との間に入ることによって、「古びた」「古くなつてとり残された」とかいうマイナスの意味合いが生じることもあるようである。

と述べている。また、巻三の三三四歌は第四句に「故去之里平(フリニシサトを)」とあるが、本稿では「故郷」、「古郷」という文字を注視したので対象外とした。

(10)

④ 大伴坂上郎女の、元興寺の里を詠む歌一首

⑤ 鳥を詠む

⑥ 花を詠む

⑦ 黄葉を詠む

⑧ 故郷の豊浦の寺の尼の私房にして宴する歌三首

(11)

歌の「フルサト(フリニシサト)」の例以外に、題詞に「故郷」、「古郷」の例が、

・和銅三年庚戌の春二月、藤原宮より寧楽宮に遷る時に、御輿を長屋の原に停めて、古郷を眺望みて作らず歌

一書云上天皇の御製(一・七八)

・長屋王の故郷の歌一首(三・二六八)

・三年辛未、大納言大伴卿、奈良の家に在りて、故郷を思ふ歌二首(六・九六九〜九七〇)

・故郷を偲ふ(七・一一二五)

・故郷の豊浦の寺の尼の私房にして宴する歌三首(八・

一五五七〜一五五九)

と五例みえるが、私的な思いを詠んでいる点においては歌の「フルサト(フリニシサト)」の例と同じである。

(12)

この歌(13・三三三〇〜三三三三)は、「神岳作歌」の吉野行

幸途次説の根拠にもなっている。清水克彦氏「養老の吉野讃歌」(『境田教授喜寿記念論文集 上代の文学と言語』一九七四年)、『万葉論集 第二』所収)は、この歌により「奈良の帝の吉野行幸にさいして、途次、明日香の神奈備山で潔斎の一夜を過し、古京への儀礼を行うことは、むしろ恒例の行事だった」と主張し、「神岳作歌」を養老七年五月の吉野行幸の途次、明日香の古京への儀礼歌ではないかとする。一方、太田豊明氏「山部赤人『神岳作歌』考」(国文学研究(早稲田大学)一〇五号・一九九一年)は、吉野行幸の途次、明日香の行宮での儀礼の場で明日香を讃美するために歌われたものが「神岳作歌」であり、その吉野行幸とは、神龜元年三月の聖武天皇の吉野行幸のことであるとす。しかし、坂本信幸氏「山部赤人論」(『セミナ』万葉の歌人と作品 第七巻)二〇〇一年)が、

この長歌(三三四)には、(中略)と春秋・山川の対句

が見られるのであり、春に山を配し、秋に川を配し、また春の日の山、秋の夜の川を対にし、その景も春山に立つ朝雲に乱れる鶴、秋の川に立つ夕霧に騒ぐかわづを対にしているものであり、それを受けた反歌に「明日香川 川淀去らず 立つ霧の 思ひ過ぐべき 恋にあらなくに」(三二五)と霧が詠み込まれていることを考えると、制作された季節は秋と考えざるを得ない。

(13)

梶川論文は「音のみし泣かゆ」の句が、「恋歌ばかりではなく、身近な人の死を嘆く歌々にもその用例は見られる」と述べながら、

この歌句には恋の情調が色濃くただよっているように思われる。単なる《懐古の情》で、「見る」ことに 哭のみし

赤人「神岳作歌」考

泣かゆ」と歌うのは、大仰に過ぎよう。この長歌は、やはり《恋の嘆き》に収斂されていると考えるべきだろう。それは、すでに「いにしへ」に属する過去の恋だったので、なからうか。

(14)

集中の「恋」(「恋ふ」、「恋ひ(ほ)し」を含め八二五例。但し、「神岳作歌」を含めない)の対象。

- ・君や妹などの人―七八〇例。
- ・花や鳥・鳥の声などの自然の景物―二十九例。
- ・吉野・玉島・竜田山のような土地―十三例。
- ・古へ―二例。

(15)

・老婆の「強ひ語り」―一例。  
反歌の「恋」を「古へ」への「恋」とすることについては、太田論文Aも本稿と同じである。

(バク ヒスク・本学大学院博士後期課程在学)